



2014.2.1.

2月 ちとせだより

神戸YMCAちとせ幼稚園

「子どもらしい子ども」とは、子どもを褒める言葉ですが、子どもが子どもらしく生活することが難しい時代になっています。本来、子どもは自分の興味や関心を原動力として様々なことをしてみたがるものですが、現代では自分の興味関心とは異なる様々な課題を与えられて、その結果に対する評価が子どもにとっての大きな関心事になっているかも知れません。「褒めて育てる」とはよく言われることですが、子どもが親に褒められること、認められることばかりを求めて、本当に自分のしたいことを見出せずにいることもまた問題です。

自分の学びたいこと、してみたいことを見出すことは、生涯にわたるその人の生き方にも通じるものですが、子どもの頃から与えられるものが多すぎると、自分自身で考えたり、決断したりして自ら動き出す経験がどんどん減少しますし、またその評価も自分の外に求めることとなります。「次は何をすればよいの?」「どうすればよいの?」「これでいいの?」、何でも親に判断と評価を求める子どもを、親はどう受け止めているのでしょうか。何でも自分で決めてしてしまう子どもを腹立たしく思っていないのでしょうか。そして、いつまでも、親に頼ってくる子どもの方が、可愛く思っていないのでしょうか。ある親は、自分の子どもが小さい時には、自分を頼って何でも言うことを聞くということを経験してしまったがゆえに、将来に渡っても子どもは自分の意のままになると思いこんでいるようにも思えます。

本来、子どもの遊びであった野球や水泳なども大人の指導の下での習い事やスポーツとなっています。ここでは、大人がプロと同じルールと効果的な練習方法を指示し、子ども自身もその習熟度に応じて序列化されていますし、指導する側と指導される側が明確に区別されていて、子ども同士の関わりや工夫は大きく制限されています。そうなれば、それは既に遊びとは到底言えないのですが、そのような時間を子どもにとっての遊びと同じように考えている親もまた多くいます。

この時期になると幼稚園での子どもたちの様子は、4月の頃とは大きく様変わりしています。幼稚園という環境を、自分自身が主体的に過ごす場として理解し、ある子どもは門の前で母親に対して「もうここで帰って」と幼稚園の中に親が入ってくることをさえ拒否します。親に干渉されたくない、踏み込まれたくない自分自身の世界を持っているのでしょう。また、友だちに出会うとお互いに名前を呼んで嬉しそうなお表情がよく見られるようになるのもこの時期で、本当に自分たちの世界を楽しんでいる姿がよく感じられます。大人の価値観ではなく、子ども自身の価値観の中で子ども自身が経験する様々なことが、成長にとって大切なことを忘れることなく、幼稚園での残された今年度の時間を大切にしていきたいと思えます。